第二部　『ヨリック氏説教集』論

第三章　＜書くこと＞のもう一つの始まり

ローレンス・スターンの文学が、『トリストラム・シャンディ』においてその最も豊かな開花を見せるに至るまでに、二つの＜書くこと＞があった。あるいは＜書くこと＞のはじまりがあった。ここに書くことのはじまりというのは、スターンにおける＜言葉＞と＜現実＞の関わりの意識――あるいはむしろ関わりなさの意識――が、彼の＜生＞を抜きさし難く支配するようになりはじめたことをいうのである。それはスターンにとってはトータルな生の問題へと向かうはじまりであり、我々にとってはスターン文学の形成史を知るための一つの出発点なのである。

その二つとは、スターンが『トリストラム・シャンディ』を書き出す直前に書いた諷刺的作品『権争物語』（一七五九年一月二十日）と、それよりずっと以前に書きはじめられていた『説教集』のことである。書くことの経験年数からいえば『権争物語』より『説教集』の方がはるかに長い。それは、何より『説教集』が、スターンの本職（牧師）に関わっているからである。だが『トリストラム・シャンディ』が生まれて来るためには、長短の違いはあれ、これら二つの書く行為がなければならなかった。

一

ローレンス・スターンの数少ない作品のうち最も早い出版物は、実は説教のパンフレットである。それは一七四七年スターン三十四才の時の慈善説教『ヱリヤの場合』である。二番目の出版物もやはり説教で、その三年後一七五〇年に出た『良心の濫用』がそれである。これはスターンのお気に入りの説教で、『トリストラム・シャンディ』第二巻でトリム伍長に読ませる説教として、スターンはこれを再び生かしている。

『ヨリック氏説教集』は右の説教パンフレットも加えて、まず一七六〇年その第一、二巻が、次いで一七六六年第三、四巻が出された。前者は『トリストラム・シャンディ』第一、二巻が出たあと、後者はその第七、八巻が出た翌年、いずれも『トリストラム・シャンディ』刊行のあいだに出版されたものである。そして一七六九年、スターンの死後、娘のリディアがスターンの親友ジョン・ホール＝スティヴンスンの協力を得て、未発表の説教を集め、『故スターン師説教集』という題で第五・六・七巻として出版した。以上の三つの説教集を合わせた収録総篇数は四十五篇、すべて聖書の一節を枕にして話をはじめ、様々なレトリックを使い、時には人の意表をつく表現を用いて、聖書の中の人物を生き生きと生かしながら、「高慢」（説教24）や「謙遜」（同25）、「幸福の追求」（同1）、「博愛のすすめ」（同3）等といった道徳を、キリスト教の伝統的、且つ博愛主義的観点から説いている。そして、その書名の頭にシェイクスピアの『ハムレット』の道化の名を冠しているのが人の注目を集めた。当時「説教集」というのは興隆期の市民たちの読み物の一つであり、宗教の教義そのものよりは、宗教より来る倫理・道徳の、いわゆ

る教訓主義を満足させるものであったと考えられる。それにしても、道化の説教集というのは人々の意表をつくアイデアであったに違いない。当時の、この『説教集』に対する批評の中には、この道化の名にこだわる実直且つ真面目な評言もあるほどだからである。

『ヨリック氏説教集』が出た一七六〇年という年は、『トリストラム・シャンディ』の第一、二巻が出て、スターンが一躍「ヨーロッパの」流行作家となった年であるが、その評判の一方では、これを猥褻とし、下品とするジョンソン博士やゴールドスミスの批判もあったので、スターンとしては、これに対して、もっと真面目な「説教集」を出して世の評判をとりたいと考えたのであった。

『説教集』は今でこそ殆ど省られることのない作品となってしまっているが、出た当座は『トリストラム・シャンディ』をむしろしのぐ非常な評判をとった。(1) それも「道徳的読み物（モラル・エッセイズ）」としてである。(2) これに対する批判は、ただその頭に道化の名を冠した不敬に集中しているのみといってよい。いずれにせよこれは、スターンにとっては成功した試みであった。『説教集』が本格的に読まれなくなったのは十九世紀に入ってからであるが、そのような事態の根本には、スターンの中に〈説教者〉としての人格の低下を見るという見方がある。我々としてはむしろ、そのような人格低下が予想されたであろうにも拘らず、『説教集』を大いに楽しんだ十八世紀の人々の精神的許容量を考えてみるべきであろう。

スターンがこの『説教集』にハムレットの父王の道化師ヨリックの名を冠したことは、現象的に見れば、『トリストラム・シャンディ』の第一巻で既に「牧師ヨリック」を登場させ、且つ開巻早々から彼を死なせ、後に再び生き

返らせているといったことから、『トリストラム・シャンディ』との連想を他易く可能にする筈というスターンの計算があったものと見ることが出来るが、一方この名前は単なるスターン流の悪ふざけではなく、実はスターンという作家の精神の位相の一つの極を示しているイメージではあるまいか。

「ヨリック」とはつまり〈死んだ道化〉である。『ハムレット』の「墓掘り人の場」[3]で、ハムレットが父王の道化ヨリックの頭がい骨を手に取って、かつてその雄弁な舌から素晴らしい笑いを生み出していたヨリックも、今は一個の骸骨にすぎぬと、思いに沈む。生命ある笑いをもたらしていた道化の生身の方は、今ははかなくなっている。時の運命の前で道化もやはり死ぬのだという訳である。つまりそこでは、笑いが死と永遠の破壊力の前に沈黙している。スターンもまた、自ら道化の、つまり笑いの、仮面をかぶりながら、つねに「無限」や「死」の観念と戦ってゆかねばならなかった。つねに笑いの限界を意識せざるを得なかったスターンが、笑いの限界を越えてしまった道化ヨリックを自己のイメージとして選んだのである。他人には悪ふざけと見えたものが、実はスターンにとっては深い内部の決意でなかったとは、誰も言えないのである。そもそも〈ヒューモリスト〉の選択とはそうしたものではないであろうか。

二

ところで、『説教集』の最初の出版は、右に見た通り一七六〇年であるが、それよりさかのぼって十ないし十三年前に二つの説教パンフレットが出版されたことは見たとおりである。従ってスターンがケンブリッジ大学を出て、

牧師の仕事をはじめた二十四才の一七三七年から、三十二才の一七四五年に至る間に、『説教集』の中の基本的な形はおおむね出来あがっていたということは十分考えられることである。[4] スターンは二十四才の新米牧師時代から、四十六才で『トリストラム・シャンディ』を書く迄のほぼ二十年間、その生涯の中心的な時期を、説教文を書きながら、それを毎週二度ヨーク付近の受持ちの教会で読んでいたからである。勿論これは『トリストラム・シャンディ』の作家になることを夢想だにしていない時代の書き物であって、その内容も殆どは当時出ていた説教集（スウィフトなども入っている）から借用したもので、その場しのぎのやっつけ仕事として書いて行ったものと見られている。アーサー・キャッシュの調べによると、スターンの「剽窃」は、出版された説教四十五篇の総語彙数十四万語のうちの一万五千五百語（十一パーセント）である。[5] だがこれをもってスターンのオリジナルなものが『説教集』にはない、と言ってしまう訳にはゆかない。この、長い習作時代の中心的産物であり、同時に現実の職業としてかなり誠実に役割を果たしていた説教という仕事の中には、スターンの基本的な宗教意識と道徳・倫理意識がうかがわれるし、さらに後に『トリストラム・シャンディ』に開花する＜シャンディ的文体（シャンディアン・スタイル）＞（この場合の文体とは、身振り・仕種といったものまで含んでいる）の萌芽が見られるからである。つまりスターンは、『トリストラム・シャンディ』に至る文体的訓練を、説教を書き・話すことの中でこそ果たして来たのだと言えるのである。

三

ここで問題点を三つに分けることが出来る。即ち、

(1)　スターンの宗教の問題
(2)　スターンの道徳・倫理の問題
(3)　『トリストラム・シャンディ』との関連の問題

である。(3)の問題は要するに〈ヒューモリスト・スターン〉の問題に収斂してゆくものであるが、この事は後で述べるとして、『トリストラム・シャンディ』との関連の上で、文体や修辞法を中心に論じた二人の評家の言葉を見ておきたい。

フランスの英文学者アンリ・フリュシェールは、この説教集によってスターンは、『トリストラム・シャンディ』の達成を保証すべき修得を行なっており、これが〈シャンディ的文体〉の発展の上で特別重要な作品であると言っている。[6] またJ・トロウゴットは、『トリストラム・シャンディ』の「聖なるはじまり（ホウリイ・ビギニングズ）」は、説教集の文体訓練の中に見出され得るし、スターンは後の作品（つまり『トリストラム・シャンディ』）でも「説教者」としての習慣を無くしはしなかったと言っている。[7] この最後の言葉はこういうことである。即ち、説教を書くさいのスターンの理想が〈劇的（ドラマチック）〉ということだったことは、彼が転地療養のためフランスに行った時、クレマンという牧師が行った説教の、動作・声色をふんだんに利用したやり方に対して感嘆の言葉を吐いていることからも想像できるが、[8] スターンが教会で実際に説教する時の〈説教者スターン〉が、作品の中では〈語り手トリストラム〉であり、〈会衆者〉がつまり〈読者〉であり、説教の際の、劇的に展開されたであろう様々な声の調子が〈様々な登場人物〉であるという、パラレルな関係が、『説教集』と『トリストラム・シャンディ』の間には成り立つということである。スターン

の読者意識は、彼の道化意識にも関わってくる問題であり、それが極めてあからさまであることは、サッカレイをして神経的な反撥感を抱かしめたほどであるが、これには恐らく、現実の、教会の信者たち相手の説教という、長い、二十数年に及ぶ職業経験（いうならばスターンの原体験）が大きく作用しているであろうと考えられる。説教壇（プルピット）に立つ以上、スターンの＜書くこと＞は、いわばつねに会衆（読者）の前に開かれたものでなくてはならなかった。そして当時の会衆が必ずしも忠実な信者ではなく、或る程度例えばホガースの描くところの『居眠り会衆』（一七三六年）の如きものであったとすれば、説教者スターンの語りかけるような会話体の文体[9]が、より積極的なものになって行ったのは当然だったであろう。スターンの意識は、この、必ずしも明晰でない会衆の興味を、如何にすれば上手く惹くことが出来るかという点に向かったに違いない。説教を書くことは、スターンにとって一対多数のウィット・コンバットを強いる行為に近かったのではなかろうか。従って、スターンのレトリックとは、説教者としての勝負を賭けた方策（ディヴァイス）であったと言えなくはないのである。

J・トロウゴットは、『説教集』の中の文体の例をいくつか挙げて、その中に見られる修辞法を示している。例示の煩雑をさけて、その名前だけ挙げると、「アポリア」（説教第20番の冒頭の難問提示による方法）、「接辞省略（アシンデトン）」、「頓呼法（アポストロフィ）」、「ものまね・声帯模写（プロソポエイア）ないし擬人化」（同18、27）、そして「エロテーシス」[10]（疑問の形で訊いてその反対のことを確信させる話し方で、一種の修辞疑問。同2）といった具合である。これらはつまり『トリストラム・シャンディ』に見られる修辞法の種類でもあって、スターンが説教を書くことの中で、『トリストラム・シャンディ』へ至るための文体訓練を行なっていたことの端的な証左である。『説教集』はこの意味で、『トリストラム・シャン

ディ』との関連において、『権争物語』とは別の意味での、ローレンス・スターンにおける〈書くこと〉のもう一つのはじまりを画した書き物であったと言える。だが勿論、このはじまりが、唯に文体的特徴に関することだけにはとどまらないので、それはまた、先に挙げた(1)および(2)の宗教・道徳思想に関わる問題でもあるのである。

宗教人スターンにあっては、宗教と道徳は切り離すことが出来ない。彼の智恵（ウィズダム）と神の啓示（レヴェレイション）は区別しがたく結びついている(説教33)。そしてその思想は、当時としても最も穏当な、寛容思想の系列に属するところの博愛主義（ビネヴォリズム）である。そしてスターンの基本的な神学的立場は、神の支配に対する伝統的な、リベラルにして且つ啓蒙的な（説教27など）立場である。それは、古くはパウロから近くはベンジャミン・ウィチコウト（ジョン・ロックのお気に入りの説教師でケンブリッジ・プラトニスト）などの、その思想の中に人本主義的な要素（ヒューマニスティック・エレメント）を有するクリスチャン・プラトニスト達に近く、同時代的には、ティロットソン、ノリス、クラークといったいわゆる英国教会内の自由（広教）主義（ラティテューディナリアニズム）の思想に最も近い。それはつまり、当時の清教徒の狂信（ファナティシズム）とも、またカトリックの形式主義（フォーマリズム）とも異なる、英国教会自由主義による中庸の位置である。彼らの考え方でゆくと、「理性」の能力は勿論人間にとって基本的なものであるが、正しい理性は決して神の顕現と矛盾しない。この点で、世界が創造されたあとでは神の干渉を必要としないとする新しい理神論と明確に対立する。自由（広教）主義においては、人間の理性と神の意志とは聖なる同盟を結んでいる。スターンの神概念の中心にはこのことがあって、神の奇跡に対する信仰をめぐってのディドロとの論争は、神を疑わぬスターンの信仰を物語っている。キリスト教の神に対するこの無批判的な確信は、スターンをそれだけ近代的懐疑から引き離したが、一方、人間の道徳を解しうる能力に

対する信頼、および神による宇宙統治の秩序感覚を確かにした。この窮極の秩序感覚から、スターンの博愛主義も自由（広教）主義も、そしてまた、『センチメンタル・ジャーニィ』でいうところの〈世界の偉大な感覚の中枢〉[11]という考え方も出て来ていると見なすことが出来るのである。

ところで右の如き教義上の理想が現実に向かう時、スターンの思想は別の広がりを持って来る。即ち、現実においては、下界の人間の事象には一つとして秩序や調和の保たれたものはない。理性と正義は欠如し、時と偶然は人間の運命に猛威をふるい、事物は予定されたようには動かない。感情（パッション）が理性をさまたげる故に、人は自己の行動を判別することが出来ない。また理性は自ら悪への傾斜をも有し、個人は高慢や自尊心の故に他者に対して不寛容になる。スターンの現実の人間についての認識は例えば次の如きものである。即ち、

> 人間はこの世の華であり――〈無限に親切で慈悲ぶかき情愛にみちた存在者〉のイメージのもとに作られたものであるが、彼はまたこの世の笑い草であり、――〈不思議と謎の間に〉生き、そうしてしょっ中失敗しているので、時には彼は、この世に〈愚行を演ずる〉ために送られて来たかのように見える。[12]（〈　〉内は『説教集』の中の言葉――筆者注）

そのような、人間の不完全さと愚かしさを見る目そのものが、スターンにおいては寛容的であるという議論はさて置いて、しかしながら、彼の諷刺的筆致には辛らつ（ピクー）なヒューマーや異端的・冒瀆的な言葉があきらかに混ってお

り、彼自身セックスやスカトロジイへの関心も強かったといったことも合わせて、彼が単に「博愛主義者」や「自由（広教）主義者」といった範疇に入り切れない部分を多く持っていることも見逃してはならぬことである。スターンの内面の問題として、一方の博愛主義をあげれば、もう一方の諷刺家・哄笑家が立たないのである。スターンにおける道徳・倫理は、この二つの極のあいだを動く。

ただしかし、このようにスターンの内面の問題がより明確に見えて来るのは、彼が『トリストラム・シャンディ』を書くようになってからのことであって、『説教集』においては、博愛主義及び自由（広教）主義者としての根本的選択を彼が果たしたことの方に、その意義の一半が認められるという点をもおさえておかねばならない。スターンの内部は、『説教集』においては未だ全的に開かれては来ないのである。

ところで『説教集』の宗教・道徳に関する見方に、「ヒューマー」という概念を入れれば、事態はなお複雑化するかも知れないが、同時にスターンの本質へ一歩踏み込むことにもなる。

いったいスターンの時代（即ちオーガスタンの時期が移行してゆく時代）の「ヒューマー」概念は、アディスン、スティール、フィールディング、ゴールドスミス等に共通の、人生に対する楽観主義をその根本に持っているが、これは、彼らなりの、「自らの時代のもっとも深い確信」（レズリ・スティーヴン）であったであろう。彼らは例えば、前時代のホッブス等の、人間性の堕落・腐敗に対する辛らつな諷刺や冒瀆的な知性とは違った見方――つまり不満の対象に対する笑いや諷刺による弾劾よりは、同情と善意で彼らの創り出した人物と共に笑うことを――欲したのである。そしてスターンもおおむねその例にもれることはない。たとえ彼の知性が冒瀆的に走ることがあって

も、である。

『説教集』においてスターンの「ヒューマー」の特質は、例えば説教第5番などの、やわらかな人間観（ソフト・ヴュー）の中にうかがわれるようなものであるが、ここでスターン文学全体に支配的な「ヒューマー」の本質論を持ち出せば、その本質を最もよく摑み得ていると思われるのは、スターンの異国の後継者の一人、ジャン・パウル・リヒターである。その要点を言えば、「ヒューモリスト」は「全体性（トータリティ）」を目指すものである故に、スターンにおいては善も悪も、不条理（アブサーディティ）も美徳も、人間的価値としては等価である。これはコウルリッジも見抜いていることであるが、つまり笑いは「無限」の視点からこれらの対立物を破壊することによって生じて来る。しかしこのような認識の仕方は、不可避的に対立するものの共時的存在を自己の内に認めねばならない故に、これを行なう人間は「憂鬱（メランコリー）」を抱え込まねばならない。その上に、自分をも笑いの対象にとり入れて、結局人間の運命の様々な対照点を知覚しなければならない。ここにこそ「ヒューマー」の本質的在り方がある、という訳である。先に引用したアーサー・キャッシュは、『スターンのモラル・センティメントの喜劇』の序文で、右のジャン・パウル・リヒターと共にエドモン・シェーラーというソルボンヌの研究者の説くところを重視して、スターンにおける「根本的な懸隔感（エッセンシャル・ディスパリティ）」を指摘したシェーラーの次の一文を引用している。即ち、

> 彼自身と彼の運命のあいだに、そして、現実の全体と、よかれあしかれ我々の精神の上に、諸事物の法則として印せられている理想とのあいだに、彼の根本的な懸隔というものがあった。この対照は至る処で明々白々

のものであった。我々は、幸福と美徳のために作られ、真実で気高く崇高なあらゆるものの方向へと定められているものと、自分のことを考えている。ところでもし我々が、誠実さを少しでも失わなければ、我々は自分がか弱く、心定まらず、狭く限られており、散文的でつまらなく、軽佻浮薄であることを認めざるを得ない。

……かくして偉大な、すべてのものに通ずる喜劇――人間喜劇――〈虚栄の市〉が開けるのである。(13)

ここで〈虚栄の市〉とはいう迄もなく『トリストラム・シャンディ』の世界を指しているのであるが、現実の不条理（アブサーディティ）に対する右の如き認識が、『説教集』を書くことの中で既にはじまっていたことは明らかなので、それが彼の自由（広教）主義神学思想の基盤もしくは母胎となっていると言えるであろう。そして、スターンの〈書くこと〉が、この母胎の方に向かう時、『トリストラム・シャンディ』の豊かな混沌の世界が開けるのである。

以上を要約すれば、宗教（及び道徳）の理想と外的現実との間の懸隔（ディスパリティ）を埋めるものとして、スターンの「ヒューマー」は位置づけ出来ると言えるのである。それはさらに、言葉と現実との距離を満たすためのスターン流の一方法となっている。

四

『説教集』の問題に戻れば、結局これは十八世紀半ばのスターンの時代の一つの幸福論であって、西洋の伝統的命題「汝自身ヲ知レ（ノウ・ザイセルフ）」という道徳的意図をその中に持ち、人間的な特性のうち最も望ましいものとして、他者に対す

る博愛と同情を、スターンとしては、「ヨリック」という道化の仮面をかぶって、現実との間合いをとりながらもかなり誠実に、称賛しているものと見なすことができるであろう。その基本的な思想は、スターンが説教を書くことをはじめたオーガスタンの時代の流れに棹を差しているが、スターンがそれを出版する時期には、すでに彼は『トリストラム・シャンディ』の作家となっていた。それ故に、その神学的・道徳的思想は前時代的、オーソドックスな、保守的な思想となっているが、その文体は『トリストラム・シャンディ』風のものに近づいている、ということになった。ともあれ、一七六〇年に『ヨリック氏説教集』としてまとまる迄に田舎牧師スターンが説教を書いてきた、その経験（書くことによって、自己にとっての言葉を発見してゆくことが、作家にとって本質的な経験である）が、やがては『トリストラム・シャンディ』及び『センチメンタル・ジャーニィ』の作家スターンを生み出すことになったので、説教を書く牧師が皆、作家になる訳ではない以上、しかも、その作品が並の小説概念からは外れてしまうような異様な作品である以上、『ヨリック氏説教集』には大きな意義があったのである。

『説教集』におけるスターンの基本的選択は今まで見て来た通り、自由（広教）主義思想ではあるが、スターン自ら『説教集』の序文で、この説教集が「博愛主義と、それと同類の美徳」にもとづいて、「頭脳（ヘッド）からというよりは心臓（ハート）から生まれてきた」[14]として、「心臓（ハート）から」という言葉を強調しているのを見ると、そこには宗教者としての説教意識よりはむしろ、猥雑な現実認識の上に立った＜ヒューモリスト＞意識が明らかである。これが『トリストラム・シャンディ』を書くことの中に既に入っているスターンの言葉であるとして、その「ヒューマー」意識を幾分差し引いて、スターンを説教活動中心の時代に引き戻して考えてみるとしても、我々はやはり、スターンの宗教者意識は

職業的な建て前に近く、彼自身はどうやら宗教者には向かなかったところがあると判断して差し支えないように思われる。しかしまたスターンの場合、建て前であるから本音がないということも言えないので、それらが渾然となっているところがスターンの本領であるという他はない。だがとにかく、生涯宗教者としての仕事を続けたスターンであってみれば、彼がその牧師という職業に負う所はいうまでもなく大きい。それはつまり、たとえ牧師の義務としてではあっても、スターンにはじめて自己表現を可能ならしめた仕事だったからである。そして、説教者としての特性は『トリストラム・シャンディ』に至っても消えることは決してなかった。特にそれは思想の面よりも文体の面において明らかであろう。

スターンは長い無名の田舎牧師の時代に、教会の仕事としてこれらの説教を書きながら、自らそれと知らぬうちに、彼独自の「ヒューマー」と「道徳（モラル）」と「文体」の訓練を行っていたのであった。それ故、『トリストラム・シャンディ』にゆきつく迄には、あとは、『権争物語』という諷刺的パンフレットを書くことによって〈笑いの精神〉を発見するというきっかけを摑めばよかった。

注

(1) Alan B. Howes, *Yorick and the Critics : Sterne's Reputation in England, 1760-1868* (New Haven : Yale Univ. Press, 1958 ; rptd 1971 as an Archon Book), pp. 9-12. Cf. Kenneth Monkman, "Towards a Bibliography of Sterne's *Sermons*," *The Shandean*, Vol. 5 (Nov. 1993) : 32-109.

(2) *Ibid.*, p. 10. Cf. *Monthly Review* (May 1760) : "If we consider them (i. e. the *sermons*) as moral essays, they are, indeed, highly commendable...."

(3) *Hamlet*, V. i. 203-04 : "[Hamlet]...Alas, poor Yorick! I knew him, Horatio : a fellow of infinite jest, of most excellent fancy."

(4) M・ニューはスターンの説教執筆活動の期間を一七三七―六五年の間と想定している。フロリダ版『説教集・注釈』(一九九六年)、五頁。Cf. Lansing Van Der Heyden Hammond, *Laurence Sterne's Sermons of Mr. Yorick* (Hamden, Connecticut : Archon Books, 1970), p. 63.

(5) Arthur H. Cash, *Sterne's Comedy of Moral Sentiments : The Ethical Dimension of the 'Journey'* (Pittsburgh : Duquesne Univ. Press, 1966), p. 25.

(6) Henri Fluchère, *Laurence Sterne, From Tristram to Yorick* (London : Oxford Univ. Press, 1965), p. 255.

(7) John Traugott, *Tristram Shandy's World : Sterne's Philosophical Rhetoric* (New York : Russell & Russell, 1970), pp. 98-106.

(8) "To Mrs. Sterne" (March 17, 1762), *Letters of Laurence Sterne*, pp. 154-56.

(9) スターンの文体の大きな特徴はその会話体にあるが、『トリストラム・シャンディ』の中で語り手トリストラムも次のように解説している。"Writing, when properly managed, (as you may be sure I think mine is) is but a different name for conversation." (*Tristram Shandy*, Vol. II, Ch. 11)

(10) 'erotesis' = 'a figure of speech by which a speaker, in the form of an interrogation, boldly asserts the opposite of what is asked.' (*O. E. D*)

(11) Cf. "The Bourbonnois" (*A Sentimental Journey*) : "—All comes from thee, great, great SENSORIUM of the world! which vibrates, if a hair of our head but falls upon the ground, in the remotest desert of thy creation."

(12) Gardner D. Stout, Jr., "Yorick's Sentimental Journey : A Comic 'Pilgrim's Progress' for the Man of Feeling," *ELH*, Vol. 30, No. 1 (March 1963), p. 409.

(13) Arthur H. Cash, *op. cit.*, p. 20. 同書巻末の書誌によれば、シェーラーの資料は次のものと思われるが、筆者は未見。Edmond Scherer, *Essays on English Literature*, trans. George Saintsbury. New York, 1891.

(14) "Sterne's Preface to the First Two Volumes of *The Sermons of Mr. Yorick*," *The Sermons of Mr. Yorick*, selected by Marjorie David (Cheadle, Cheshire : Carcanet Press, 1973), pp. 30-31.

第四章　スターンの教育論——説教第20番

一

ローレンス・スターンの説教の出版は、前章で見たように一七四七年ヨーク市立慈善学校基金募集のための説教、『エリヤの場合』が最も早く、次いで一七五〇年『良心の濫用について』が出ている。説教集としては、それら二つの説教を含めて、『トリストラム・シャンディ』第一、二巻の出た直後の一七六〇年『ヨリック氏説教集』（i—ii）と、その六年後の続編、一七六六年『説教集』（iii—iv）という形で出版されている。これらは殆どすべて、スターンが作家的出発をする四十五歳台までの、作家スターンを準備した書き物として重要であるばかりでなく、ハモンドも「少なくとも世紀の半ばまでに、スターンはすでに相当の文学的技法を獲得していた」[1]と述べているようにその文学的卓越性も認められている。そして出版当時は、一部に説教集の性格について批難する向きもあったとはいえ、むしろ『トリストラム・シャンディ』以上の人気を得た書き物だったのである。そういう事情もあってス

ターンの死後の一七六九年、『故スターン師説教集』（v―vii）まで出版されることになったのである。しかし、時代が移るにつれて説教集は読まれなくなり、十九世紀から今日に至るまで殆どふりかえられることもなくなっているというのが実情である。ウォルター・バジョットの『文学研究』（II）に次の様な評言があるのは、今日までの大方の批判を表わしていると思われる。即ち、「スターンは異教徒だった。彼は教会人にはなっていたが、優れた鑑定家であるサッカレイ氏も正当に評価したように、彼の説教集には〈キリスト教徒らしい感情〉は少しもなかった。道徳的エッセイとしては上手く表現されているし、力強くもあったが、今はその評価も変わった。[2]」

しかし今日、スターン文学の全体像を捉えようとする場合、その説教集が独特の意味合いを持っていることは確かなことに思われる。そしてこの意味合いについては二つの側面に分けて考えられる。一つは思想の面、もう一つは文体（朗読）の面である。思想というのは、具体的にはジョン・ロックの教育論にかかわる問題であるが、これは本稿で取り上げる説教が特にロックに関係があるためであって、説教集全体の思想としてはいわゆる「ラティテューディナリアニズム」によってまとめることが出来るであろう。ロックの教育論との関連は、その中の一断面を明らかにするものである。文体（朗読）というのは、ここではスターンの説教の言葉を導びく想像力の働かせ方、あるいはスターンの言語的想像力といった意味で使いたいと思う。本論は、これら二つの問題点を中心に議論を進めるものである。

二

説教集収録の説教、全四十五篇中、導入部分として各説教に付された聖書の目次の中で最も多いのは、「ルカ伝」の五回（説教3、6、20、23、24）であるが、いまこのうち説教第20番「放蕩息子の話」を選んでみる。

この説教に付された言葉は、「ルカ伝」十五章十三節の“And not many days after, the younger son gathered all he had together, and took his journey into a far country.”（数日後、弟は全部をまとめて遠い国に移り、そこで放蕩生活を送って財産を使い果たした）である。良く知られているように、これは前節十五章三—十節の「いなくなった羊と無くなった銀貨の譬え（トロクメ）」に続く「放蕩息子の譬え」のエピソードである。「或る人に二人の息子があって、[11]弟が父親に、財産のうちの半分を自分の分として呉れと言う。父は身代を二人に分けてやる。[12]数日後、弟の方が全部をまとめて遠い国に移り、そこで放蕩して財産を使い果たす。[13]その後その国にひどい飢饉が起こり、弟は万事窮してしまう。[14]そこである人のもとへ居候になり、畑で豚を飼わせられる。[15]彼は豚の食べる豆がらで腹を満たしたいと思ったが、それをくれる人もない。[16]そこで我に返って言った、『父のところは大勢の雇い人がたくさんのパンを得ているのだ。この私は飢え死にしそうになっているのに。[17]立って、父のところへ帰ってこう言おう、父よ私は天に対してもあなたに対しても罪を犯したので、[18]もはやあなたの息子と呼ばれる資格がありません。雇い人のひとりにして下さい。』[19]そこで父のところに帰って行ったが、まだ遠く離れている間に父親は息子を見つけ、首を抱いて接吻する。[20]息子はまた、彼の息子と呼ばれる資格のないことを言うが、[21]父は僕たちに言いつけて、

彼に最上の着物と指輪とはきものを与え、[22]子牛をほふらせ、一緒に食べて楽しもうと言う。[23]なぜなら、この私の息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。そう言って祝宴を始める。[24]兄の方は畑にいたが、音楽や踊りの響が聞こえたので、[25]僕を呼んで何事かと事情を尋ねる。[26]僕が、弟の帰ったこと、彼のために肥えた小牛をほふったことを伝えると、[27]兄は怒り、家に入ろうとしないので、父が出てきてなだめる。[28]兄は不平を言う、何年もあなたのもとで、僕のように言いつけにもそむかずに仕えて来たのに、子やぎ一匹も、友達と楽しむために私にくれたことはない。[29]ところが遊女どもと一緒に遊び、身代を食いつぶした弟には肥えた子牛をほふらせるとは何事ですか！[30]父親はこれに対して答えて言った、息子よ、おまえはいつも私と一緒にいるし、私のものは皆おまえのものだ。[31]しかし、このおまえの弟が死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、これが喜び祝わずにおれようか。[32]」

「放蕩息子の譬え」はこれが全部であるが、スターンはこれらの節の中からとりわけ十三節の、しかも後半の“and there wasted his substance with riotous living.”の部分は省いて、敢えてその前半のみを説教の前置きとしたのである。彼の話の重点は特に、“and took his journey into a far country”という個所に置かれている。

スターンは、この話がイエスが語った通りの譬え話であるか、イエルサレムで当時よく知られた何かの話を基にしたものかの論議は、この説教の目的ではないとして、聖書学者達がよくやるような議論を避けることから始める。[3]

スターンはまず、第十一～十三節までを読み、話の叙述は簡潔単純だが、ここに語られる「自然」は多弁であると言う。

The account is short: the interesting and pathetic passages with which such a transaction would be necessarily connected, are left to be supplied by the heart: ——the story is silent——but nature is not: ——much kind advice, and many a tender expostulation would fall from the father's lips, no doubt, upon this occasion. (p. 186)

父親と息子の間の感情の交流——父親の親切な忠告や訓戒の数々——がそこに見られたであろうと説教者は想像の翼を拡げる。これに続いてスターンは、この父親が、旅というものの危険なことや、息子の年の未成熟なこと、連れもない旅をするさいの生命・財産・美徳の上での危険などを示して、このような愚かな企てはやめるようにと言い、また様々な誘惑やワナ、快楽に迷えば得るところは皆無たること、女性のそそのかしや手練手管、彼女らの毒のこと等々について息子に話して聞かせるであろう、と想像する。このあたりからスターンはいわば小説的肉付けを行っている。こうした父親の諫言もただ息子の欲望の火を燃え上がらせるばかりであろう、と言って次の様に出発の情景を描き出す。

The dissuasive would but inflame his desire. ——

He gathers all together. ——

——I see the picture of his departure: ——the camels and asses loaden with his substance, detached on

one side of the piece, and already on their way : ——the prodigal son standing on the fore ground, with a forced sedateness, struggling against the fluttering movement of joy, upon his deliverance from restraint : ——the elder brother holding his hand, as if unwilling to let it go : ——the father, ——sad moment ! with a firm look, covering a prophetic sentiment, "that all would not go well with his child," ——approaching to embrace him, and bid him adieu. —— (p. 187)

この愁嘆場に続いて、こう息子に呼びかける。

Poor inconsiderate youth ! From whose arms art thou flying ? From what a shelter art thou going forth into the storm ? Art thou weary of a father's affection, of a father's care ? or, Hopest thou to find a warmer interest, a truer counsellor, or a kinder friend in a land of strangers, where youth is made a prey, and so many thousands are confederated to deceive them, and live by their spoils ? (p. 187)

聖書の簡明な記述の間を、このように感情を込めて豊かに埋めてゆく説教者の想像力は、『トラストラム・シャンディ』や『センチメンタル・ジャーニィ』に見る作者の想像力と変わるところはないように思われる。

やがて息子は財産を使い果たし、さらに大きな災難におそわれる。聖書は言う、"for when he had spent all, a

mighty famine arose in that country."この危機にのぞんだ時の若者への同情を、"Heaven! have pity upon the youth, for he is in hunger and distress——stray'd out of the reach of a parent,..."というように呼びかけたスターンは、次のような観察を述べる。

> Nothing so powerfully calls home the mind as distress: the tense fibre then relaxes, ——the soul retires to itself, ——sits pensive and susceptible of right impressions: if we have a friend, 'tis then we think of him; if a benefactor, at that moment all his kindnesses press upon our mind. ——Gracious and bountiful God! Is it not for this, that they who in their prosperity forget thee, do yet remember and return to thee in the hour of their sorrow? (p. 188)

これはスターンのモラリティと宗教者的心情が渾然一体となっている例と考えることが出来る。つまり、'if we have a friend, 'tis then we think of him; if a benefactor, at that moment all kindnesses press upon our mind.' の部分はスターンの考えるモラル上の判断あるいは解釈であり、すぐその後に神への感謝の言葉が想起されているところに、モラリティと微妙に重ね合わされているスターンの宗教意識がある。

これらのモラリティと宗教がどのような関係にあるかは、説教第27番「良心の濫用」を伍長のトリムが読む『トリストラム・シャンディ』第二巻十七章の個所がさらに明らかにするであろう。

As, therefore, we can have no dependence upon morality without religion;——so, on the other hand, there is nothing better to be expected from religion without morality;——nevertheless, 'tis no prodigy to see a man whose real moral character stands very low, who yet entertains the highest notion of himself, in the light of a religious man. (*Tristram Shandy*, I [Florida edn.], p. 159)

これによって、スターンの理想とするものが、道徳的品性と宗教心の合一というところにあるということが出来る。そしてこの説教を読んでいるトリム伍長の兄トムが、異端審問裁判によって十四年間も捕われの身であることが語られ（二巻十七章）、同じ場面に、カトリック諷刺の対象としてスロップ医師が登場していることを考えると、スターンのモラリティが宗教的不寛容と対決する寛容主義であるということが分かる。一方、この後の説教の一節には、"Man surely is a compound of riddles and contradictions." というモラルに関わる発言といってよい言葉が語られる。人間を〈謎〉と〈矛盾〉の混合物と見なすというのが、スターンの基本的な人間観であったように思われる。しかもこの人間観は寛容主義と矛盾しない。スターンのこのような観察に、喜劇的意識を入れてみよう。そうすれば、ヒューモリスト＝スターンの顔がそこに現われるであろう。このヒューモリストは、宗教的寛容を支持し、しかし、説教27で見るように人間の良心のあやまりやすさをも見ているモラリストである。前節に続く次の引用には、罪に陥りやすい人間一般の傾向についての観察が含まれている。

Strange!——that we should only begin to think of GOD with comfort,——when with joy and comfort we can think of nothing else.

Man surely is a compound of riddles and contradictions: by the law of his nature he avoids pain, and yet *unless he suffers in the flesh, he will not cease from sin*, tho' it is sure to bring pain and misery upon his head for ever. (p. 188)

この後、若者が故郷の父の家の豊かさに思いをはせ、自分の異邦での苦労がいかに大変だったかを父に語りたいと思う、その内容をスターンは冒険談よろしく想像的にふくらませる。この辺りにもスターンの作家的想像力が働いている。

How shall the youth make his father comprehend, that he was cheated at Damascus by one of the best men in the world;——that he had lent a part of his substance to a friend at Nineveh, who had fled off with it to the Ganges;——that a whore of Babylon had swallowed his best pearl, and anointed the whole city with the balm of Gilead;——that he had been sold by a man of honour for twenty shekels of silver, to a worker in graven images;——that the images he had purchased had profited him nothing;——that they could not be transported across the wilderness, and had been burnt with fire at Shusan;——that the apes

and peacocks, which he had sent for from Tharsis, lay dead upon his hands; and that the mummies had not been dead long enough, which had been brought him out of Egypt:——that all had gone wrong since the day he forsook his father's house. (p. 189)

ダマスカスで人に騙されたり、他の町で彫刻師の所に売られたり、バビロンの娼婦に真珠を取られたり（それも普通の取られ方ではない）というような着想は恐らく会衆（読者）を笑わせたであろう。中近東エジプトの各地が、若者の放浪をテーマに観念連合的に、しかも喜劇的意識を込めて次々と語り出されるこのような呼吸は、一面では国教会牧師の一般的な説教のパターンを示すものかも知れないが、他方では、スターンの〈書くこと〉の基本的パターンを示していると言い得よう。

やがて父親は貧窮の果ての息子を迎え入れる。モラリティによる観察とともにスターンは次のようにコメントを加える。

Generosity sorrows as much for the over-matched, as pity herself does.

The idea of a son so ruin'd, would double the father's caresses:——every effusion of his tenderness would add bitterness to his son's remorse.——"Gracious heaven! what a father have I rendered miserable! (p. 190)

父親が、帰って来た息子のために祝宴の用意をさせることになった、その時のよろこびが宗教的に高まる様子は次のように表現される。

When the affections so kindly break loose, Joy, is another name for Religion. (p. 190)

以下、祝宴が開かれるまでの話をした説教者は、この譬え話の主題について説こうとする。この時のスターンの解説はいささか変わったものであって、彼は、神がこの〈放蕩息子〉によってキリスト教徒の罪と悔いあらためを教え、〈その兄〉によって、「つむじ曲りのユダヤ人」を表わそうとされたのか、私には分からないと言い、それよりもこの息子を導いた'fatal passion'について考えてみたいと言うのである。ここでも、神学的論議を避けて、宗教者としての姿勢よりはモラリストとしての姿勢をより明らかにするのである。

かくしてスターンは、若者一般の〈教育〉と〈放蕩息子の旅〉を結びつける議論に入るのであるが、その要点をかいつまんでいえば、異邦の言語・法律・習慣・政治・国民の関心等を学ぶこと、要するに他国のものを見ることが自己の教育につながるであろうと考えている(p. 192)。しかしその旅が年齢的に早すぎてもいけないという。そして、少年には連れを(とくに学者を)つける方がよい、と次のように説く。この辺り、フランシス・ベイコン[4]やジョン・ロックの大陸旅行論を伝統的あるいは常識的に踏まえていることはいうまでもないであろう。

But you will send an able pilot with your son——a scholar.——

If wisdom can speak in no other language but Greek or Latin,——you do well——or if mathematicks will make a man a gentleman,——or natural philosophy but teach him to make a bow,——he may be of some service in introducing your son into good societies... (p. 193)

そして、他国の人間と交す会話は、いわば交易（trafficあるいはtrade）であって、充分な知識の貯えがないとうまくゆくものではない。旅行者たちがその土地の人々と殆ど会話を交すことがないのは、この貯えが無いためで、こういう結果、失望した若者はより安易な環境（an easier society）を求めることになり、彼の経験はやがて終わる。そしてこのあわれな放蕩息子は、福音書の中の息子と同様の憐憫の対象となって終わるであろう。以下がその最後の部分である。

Conversation is a traffick; and if you enter into it, without some stock of knowledge, to ballance the account perpetually betwixt you,——the trade drops at once: and this is the reason,——however it may be boasted to the contrary, why travellers have so little (especially good) conversation with natives,——owing to their suspicion,——or perhaps conviction, that there is nothing to be extracted from the conversation of young itinerants, worth the trouble of their bad language,——or the interruption of their

visits.

The pain on these occasions is usually reciprocal; the consequence of which is, that the disappointed youth seeks an easier society; and as bad company is always ready, ——and ever lying in wait, ——the career is soon finished; and the poor prodigal returns the same object of pity, with the prodigal in the gospel. (p. 194)

全体の話としてみるとスターンは、この放蕩息子の話から通常考えられるように、父親の赦しに拠ってイエスの教えというものを説くというふうには結論づけていないことが面白い。父親の愛から離れて旅立ち、自らを罰する苦しみの中にある息子を神から離れる罪人と見做して、それに対するいましめを説くというのがこの譬えの主題であると思われるが、スターンはむしろ、父のもとから離れる息子を〈教育〉という面から捉え直し、息子の旅立ちを〈神から離れること〉の暗喩とは解釈せず、新しく人間の経験における正の価値として考える。これは福音書「ルカ伝」に対するスターン独自の解釈であり、この点に、この説教の特長の一つがあると言うことができる。

三

これまで見たように、スターンが放蕩息子の話の教訓的なアレゴリー解釈を無視して、いわば説教の本筋からの脱線を行なったことは、脱線自体が方法として活用されている『トリストラム・シャンディ』の作家らしいやり方

というべきであろう。しかもこの脱線によって、この説教の場合、〈教育〉のテーマへの展開という新しい意味づけが行なわれている訳である。

ところでここに持ち出された教育論は、ジョン・ロックの“Some Thoughts Concerning Education”[5]からの借用によって成り立っている。スターンはロックによって、『トリストラム・シャンディ』の基本的方法として、その「観念連合」(association of ideas) の考え方を与えられたほどの深い影響を受けたことはよく知られた事実である。その影響がこの説教にもあらわれている訳であるが、ハモンドの調べによればロックからの引用は計四ケ所にわたり[6]、譬え話の一応の解説が終わったあとは殆ど最後までロックによりかかって説教を進めていると言ってよい。だが、これをスターンの剽窃のくせや独創性の欠如のせいにするのは早計であろう。スターンの引用の仕方はむしろ、ロックの原典からの脱線とまではゆかないにしても、その翻案であると言っても良いものである。具体的な例を一、二見てみよう。始めにロックを挙げ、その後に説教文を挙げる。

Locke, sec. 93 : “The Character of a Sober Man and a Scholar is... what every one expects in a Tutor. This generally is thought enough and is all that Parents commonly look for. But when such an one has emptied out into his Pupil all the Latin, and Logick, he has brought from the University, will that Furniture make him a fine Gentleman ?”

Sterne, (p. 193, 11. 6-11): "But you will send an able pilot with your son——a scholar.——/ If wisdom can speak in no other language but Greek or Latin, ——you do well——or if mathematicks will make a man a gentleman, ——or natural philosophy but teach him to make a bow, ——he may be of some service …"

家庭教師はどういうタイプの人間がよいかという議論であるが、ロックがいう'a Sober Man'は抜けて'an able pilot'としてのscholarの点だけが強調され、家庭教師が習得している学問としてロックの場合の「ラテン語と論理学」が、スターンでは「ギリシャ語またはラテン語」あるいは「数学」や「自然哲学」というふうに連想が進み、而も多少それらがヒューモラスに扱われていることが分かる。(7) ロックの教育論は、「紳士」Gentlemanとなるための教えという所にその目的があるのであるが、スターンにあってはそのような理想はむしろ遠ざけられているように思われる。その辺の事情は、次に挙げる大陸旅行論の個所からの引用によって今少しあきらかになるかも知れない。

Locke, sec. 212: "The time therefore I should think the fittest for a young Gentleman to be *sent abroad*, would be… when he is some Years older… [and] being thoroughly acquainted with the Laws and Fashions, the natural and moral Advantages and Defects of his own Country, he has something to exchange, with those abroad, from whose Conversation he hoped to reap any knowledge."

Sterne, (p. 194, 11. 14—21): "Conversation is a trafficck ; and if you enter into it, without some stock of knowledge, to ballance the account perpetually betwixt you, ——the trade drops at once : and this is the reason... why travellers have so little (especially good) conversation with natives, ——owing to their suspicion, ——or perhaps conviction, that there is nothing to be extracted from the conversation of young itinerants, worth the trouble of their bad language, ——or the interruption of their visits." (筆者注—これは先に引用してもいる、説教の最後から二番目の一節である。)

スターンが借用した個所は具体的にはロックの引用の最後の 'to exchange, with those abroad, from whose Conversation...' の部分だけである。ロックの場合、「紳士」となるべき者が外国旅行をするさいの最適の時期は、家庭教師についている若い時期か、あるいはもっと年をとって監督する者が不要になった時期がよいと説いているのにたいして、スターンはその文脈を無視したうえ、「会話」という言葉を基点にして、「会話」が成立しない場合を強調する方へ話を進める。そしてその後の結論の一節は、大陸旅行の成果がむしろ実りのないことを説いて、意外にも悲観的な調子で終わっていることを考えると、スターンはこの説教において、放蕩息子の放浪にたいして新しい経験としての教育的価値をそれにつけ加えていると同時に、つまりその放浪を連想作用によって大陸旅行論に結びつけ、それを奨励すると同時に、それにたいする否定的な現実観をも示していると言うことが出来る。つまりスターンは、聖書（福音書「ルカ伝」）からも、ロック（その教育論）からも少しずれたところで、その説教者的・

ヒューモリスト的姿勢を取ろうとしているかのようである。その〈ずれ〉は、スターン個人の奇矯さに帰することが出来るかも知れない。しかしそれは一面では、ロックの時代までの大陸旅行論の変化を意味するものであるかも知れない。ロックの属した十七世紀の貴族主義的教育観が、ブルジョアジーの台頭によって批判的修正を受けて来たのではなかったかとも考えられるのである。

しかしながら、ジョン・ロックの教育論は、「テレームの僧院」によってその教育的ユートピアを描いたラブレーや、[8]十七世紀のフランスが理想としたオネットオムhonnête hommeという人間像をめざして良識による教育を説いたモンテーニュからの影響を受け、[9]今度はそれがルソーの『エミール』に影響を与えていった訳であるが、その大筋において、「理性」への信頼といういわば時代的命題とともに、スターンの時代においても支配的な考え方であって、スターンもまた自然にそれを受け入れていたであろうことは否定できない。それどころか、ラブレー、モンテーニュからロックへと続く系譜こそは、シェイクスピアおよびセルバンテスとともにスターン文学を形成する主流に他ならないのであり、教育論というテーマは、ロックを中心にして他のユマニスト達、あるいはいわゆる「博学の才人（ラーニッド・ウイット）」達とスターンとの関連をあらためてあきらかにするものである。

ところでスターン自身の教育にたいするアイデアは、『トリストラム・シャンディ』第五巻第十六章において語られる例の『トリストラム教育方針』'TRISTRA-pœdia' のエピソードにあらわれている。これは、父親ウォルター・シャンディが、主人公兼語り手であるトリストラムの幼年時代の教育方針を書物にしようとする話である。ウォルターはすでに、息子トリストラムの人生のための三つの賭け——その〈種つけと鼻と名前〉と——にことごとく負

けて、今は〈教育〉が最後の賭けとなっている。だが、その仕事は「三年たっても」半分ほどしか進まず、その書き物が著しくさまたげられているのを「悪魔の誘惑」のせいにしているありさまである。おまけに、教育のもたらす「偏見」は悪魔そのものであり、母親の乳の中にもすでにその「悪魔の集団」は入り込んでいるのだと、口癖のように言っている。

Prejudice of education, he would say, *is the devil,*——and the multitudes of them which we suck in with our mother's milk——*are the devil and all.*——We are haunted with them, brother *Toby*, in all our lucubrations and researches...[10]

そんな具合であるからトリストラムの成長に父親ウォルターの教育方針が追いつけないのである。

つまりスターンはここで、教育そのものの、あるいは教育についての書物の、不可能性を、作品全体の〈失敗〉あるいは〈不運〉のテーマと結びつけて寓意的に語っていると考えることが出来るのであって、その教育に対する懐疑は、説教「放蕩息子の話」の結論部と軌を一にするものであるということが出来る。そしてこのような懐疑的教育観つまりは懐疑的人間観は、観念史的な流れから見れば、例えばモンテーニュの人間観に通底していたのではなかったかと思われるのである。

注

＊　本稿は昭和五十三年五月六日、十八世紀英文学研究会例会における談話を基にしたものである。テクストはWilbur L. Cross, ed., *The Complete Works And Life of Laurence Sterne, V : The Sermons of Mr. Yorick* (AMS Press, 1970) のいわゆる'Yorick Edition DeLuxe'を使用した。フロリダ版も参考にし、各引用文の後の頁数は同版に拠っている。

(1)　Lansing Van Der Heyden Hammond, *Laurence Sterne's 'Sermons of Mr. Yorick'* (Hamden : Archon Books, 1970), p. 56.

(2)　Hammond, p. 90と引用。

(3)　荒井献「イエスと福音書文学——〈放蕩息子の譬話〉によせて」、『神話・文学・聖書——西洋古典の人間理解』(教文館、一九七七年) 所収論文、参照。荒井論文では、この譬話を、イエス自身の実際の話、イエス以前の伝承の「古層」から出たものとするか、または「ヘレニズム著作家」として最も自覚的な作家であったとされるルカの、「創作とは言えないまでも、ルカ自身の思想に比較的に適合する」譬話であるとする問題の中でとらえ、後の方の、つまりこの譬えをルカ自身の思想的傾向を示すものという解釈を取っている。

(4)　"Of Travel" (Essay XVIII) in *Essays* (Everyman's University Library, 1975), p. 54＝"TRAVEL, in the younger sort, is a part of education ; in the elder, a part of experience.... That young men travel under some tutor, or grave servant, I allow well ; so that he be such a one that hath the language and hath been in the country before ; whereby he may be able to tell them what things are worthy to be seen in the country where they go ; what acquaintances they are to seek ; what exercises or discipline the place yieldeth."

(5)　ロックのテクストは、James L. Axtell, ed., *The Educational Writings of John Locke* (Cambridge : Cambridge Univ.

Press., 1968) を使用した。引用の際のsection numberも同版に拠る。

(6) スターンが下敷きにしたロックからの引用の四個所は、セクション番号[93][212a][212b]そして[214]である。本文で引用するのはこのうち第一番目と第三番目である。

(7) Cf. *Tristram Shandy*, VI, 5.

(8) 「テレームの僧院」の話は、『ガルガンチュワとパンタグリュエル』第一の書「ガルガンチュワ物語」第五十二—五十七章あたり、ガルガンチュワの幼児教育法の話は第十一—十五章あたりに出てくる。

(9) 『エセー』第一巻第二十六章「子供の教育について」参照。

(10) James A. Work, ed., *Tristram Shandy* (New York : The Odyssey Press, 1940), p. 375. Cf. Florida edn., Vol. I, p. 446.